

1. プログラム概要

- 日 時：2022年6月30日（木）17:00～18:30（開場：16：45）
- テー マ：「人々を作るパブリック・コレクション：独・ルートヴィヒ美術館における現代美術コレクションの形成」
- 概 要：ドイツ・ルートヴィヒ美術館よりイルマーズ・ズィヴィオー館長をお招きし、市民による美術館の現代美術コレクションの形成について紹介いただくとともに、日本におけるパブリック・コレクション形成の在り方について考える。
- 登壇者：【 講 師 】イルマーズ・ズィヴィオー（ルートヴィヒ美術館館長）
【モデレーター】片岡真実（日本現代アート委員会座長、アート・コミュニケーションセンター（仮称）エグゼクティブ・アドバイザー、森美術館館長）
- 参加方法：①国立新美術館 3階講堂（東京都港区六本木 7-22-2）
定員：70名（先着申込順）
申込フォーム：<https://forms.office.com/r/kNeX1bBkJx>
- ②YouTube ライブ配信
定員：なし（事前申込不要）
視聴 URL：＜日本語＞ <https://youtu.be/parTpvbxnYM>
＜英 語＞ <https://youtu.be/mxRorcJ0D88>
- 使用言語：英語及び日本語（日英同時通訳あり）



2. 企画背景



18世紀末より、市民が主体的に活動する「クンストフェライン（芸術協会）」の伝統を持つドイツでは、公的な美術館の活動に市民が積極的にかかわってきた。ドイツのケルン市が運営するルートヴィヒ美術館もまた、その設立と活動に市民が大きな役割を果たしている公的美術館のひとつである。美術館の構想は、ペーター&イレネ・ルートヴィヒが、ポップ・アートやロシア・アヴァンギャルドなど、約350点の作品をケルン市に寄贈した1976年に始まった。また同館は、ケルンの弁護士だったヨーゼフ・ハウプリヒが1946年にケルン市に寄贈した表現主義や新即物主義などの近代美術や、レオ・フリッツ&レナーテ・グルーバーの協力から始まった膨大な写真コレクションなど、多数の個人コレクターに由来する作品群を所蔵する。

一方、同美術館の現代美術コレクションの形成には、「ルートヴィヒ美術館ケルン現代美術協会」も大きく貢献している。1985年、現代美術振興と美術館支援を目的に設立されたこの組織は、現在約650人の会員からなり、2018年にはアメリカに国際支部も設けられた。協会は、さまざまなプログラムやイベントを実施するほか、作品の購入も支援している。また、同美術館の現代美術コレクションの拡大には、「ルートヴィヒ美術館芸術財団」が担う役割も大きい。2008年にケルン市が設立したこの財団は、地方自治体が設置したドイツで初めての財団のひとつであり、作品の寄贈に関心があるコレクターを支援することで、美術館のコレクション拡大に寄与している。

このようにルートヴィヒ美術館では、市民の協力を得るさまざまなシステムがうまく機能している。そこで、館長のイルマーズ・ズィヴィオー氏より、美術館と市民の生きた交流とその成果を紹介

いただき、日本において、どのように民間のプライベート・コレクションを、美術館のパブリック・コレクションとして継承していくことができるのか、美術館におけるコレクションの在り方について考える機会としたい。

3. 登壇者プロフィール（敬称略）

 <p>Photo: Falko Alexander</p>	<p>イルマーズ・ズィヴィオー ルートヴィヒ美術館（ドイツ・ケルン）館長</p> <p>ドイツのハンブルク・クンストフェライン館長、オーストリアのブレンゲンツ美術館（KUB）館長を経て2015年2月より現職。2015年のベネチア・ビエンナーレではオーストリア館の、今年2022年にはドイツ館のキュレーションを務めた。『Artforum』や『Camera Austria』、『Texte zur Kunst』に定期的に寄稿。20・21世紀美術に関して、展覧会カタログを含め50冊以上の書籍の刊行に関わり、国外の美術館とのコラボレーションも数多い。アイデンティティ・ポリティクスや文化的帰属などを含めた社会的問題に焦点を当てており、アフリカ、ラテン・アメリカ、アジアに強い関心を持つ。近年手掛けた展覧会に「Haegue Yang:ETA 1994-2018」展（2018年）、「We Call It Ludwig」展（2017年）などがある。</p>
 <p>©伊藤彰紀/撮影</p>	<p>モデレーター：片岡 真実 日本現代アート委員会座長／ アート・コミュニケーションセンター（仮称）エグゼクティブ・アドバイザー／ 森美術館館長</p> <p>ニッセイ基礎研究所都市開発部研究員、東京オペラシティアートギャラリー・チーフキュレーターを経て、2003年より森美術館。2020年より館長。2007～2009年はヘイワード・ギャラリー（ロンドン）にて、インターナショナル・キュレーターを兼務。第9回光州ビエンナーレ（2012年）共同芸術監督、第21回シドニー・ビエンナーレ芸術監督（2018年）、国際芸術祭あいち2022芸術監督。CIMAM（国際美術館会議）会長、京都芸術大学大学院客員教授、東京藝術大学客員教授。文化庁アートプラットフォーム事業・日本現代アート委員会座長。AICA（美術評論家連盟）会員。その他、日本およびアジアの現代アートを中心に執筆・講演・審査等多数。</p>

4. 文化庁アートプラットフォーム事業とは

日本における現代アートの持続的発展を目指し、現代アート関係者の意見を幅広く集約し、日本人及び日本で活動する作家とその作品が国際的な評価を高めていくための取組等を推進するものです。ステアリングコミッティーとして「日本現代アート委員会」を設置し、①日本の現代アートに関する文献の英訳を進め、国際的な研究を喚起する、②日本国内の美術館収蔵品情報を横断的に検索できる日英バイリンガルのデータベースを構築する、③国内外のキュレーターや研究者の世代を超えた人的ネットワーク構築を目指し、招待制ワークショップを実施するといったプログラムを包括的に行っています。 <https://artplatform.go.jp/ja/about-this-website>

<担当> 文化庁 文化経済・国際課
課長 板倉 寛 （内線 2845）
文化戦略官 林 保太 （内線 2858）
連携推進係 関谷 泰弘 （内線 4844）
電話：03-5253-4111（代表）
03-6734-4844（直通）